

平成28年度 第2回講演会 記録

日 時	平成28年4月23日（土） 13:00～16:00
会 場	此花会館 梅香殿
講 師	清光林業（株） 会長 岡橋 清元先生
演 題	日本林業再生の道
備 考	参加者数 170名（会員156名、一般14名） 記録 藤原 雄平

吉野で代々山林業を営んでこられた清光林業株式会社のトップとして、新しい山林経営を目指して日々取り組んでおられる岡橋講師から吉野林業を取り巻く環境・課題・対策・展望についてお話を伺った。林業再生のためには、山林内の路網の整備、壊れない道づくりの必要性を痛感されて、先達の大橋氏の指導も得て、作業道作りに実績を挙げてこられた。道作りにより、山林経営の新しい“道”への展望を開き、老若男女が楽しく働ける作業環境が生まれることが期待される。



1. 吉野林業の歩み

- ①吉野林業のルーツは後南朝時代まで遡る。南北朝の時代、南朝の皇居は吉野に置かれ、南北統一後も、遺臣達は南朝の復位（御南朝）を目指した。夢は叶わなかったが、後南朝の関係者たちは、そのまま吉野に残って林業に従事した。これが吉野林業の始まりとなった。
- ②江戸時代中期ごろには、山守制度（所有者と管理者の分業）が確立し、吉野林業の基盤となった。
- ③吉野林業の特徴は、密植造林、多間伐施業、長伐期施業。
密植の故に年輪幅が密で細かく酒樽の樽丸材には最適で明治から昭和の初期にかけて活況を呈した。樽丸材を始めとして間伐材も飛ぶように売れたが、近代化に伴う代替品の進出により需要減となったため、活路を高級建築材に方向転換。戦後は復興需要で潤い、ヘリコプター搬送しても採算が取れるほどだった。
- ④昭和57年をピークに木材価格は続落、台風被害による品質低下や、輸入材の増大、日本人の価値観の変化が追い打ちをかけて林業は行き詰まりとなった。林業再生への模索が始まる。

II. 林業再生への道

- ①かつてはヘリコプターで搬出しても採算に乗った時代もあったが、木材価格の下落に見合う低コスト搬出対応策には、山林内を走る路網の整備、壊れない道が不可欠と気づき、林道作りの先達、大橋氏の指導を基に新しい道作りを始めた。
- ②日本列島はその成立過程故に森林地帯の傾斜は厳しい。木の葉の葉脈をヒントに、等高線、植生等を調査して、軽トラックが走れる幅 2.5Mの管理道と搬出道を併用した林道路網を広げていった。
- ③道が出来ると山の仕事の環境が変わった。 → 若者が（高齢者も）林業に携わり易くなった。斜面でなく平地でできる作業が増え安全性が増した上、少しの雨なら作業中止することも無くなった。勿論、搬出コストは安くなった。
- ④路網整備による林業再生に光明が期待できるが、木材価格の急激な乱高下の防止など、林業経営の課題はまだまだある。
- ⑤林業の再生には日本らしいきめ細かく総合的に考えることが大切で、必要なものを必要な時に必要な量だけ生産できる林業を目指したい。

以上